

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 13 日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580017

研究課題名(和文) 音楽経験の思想史への挑戦 身体知と主体化からのアプローチ

研究課題名(英文) In search of the history of musical experience: an approach through body-knowledge and subjectivity

研究代表者

佐藤 淳二 (Sato, junji)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：30282544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：2014年3月17日東京藝術大学音楽学部ホールにおけるレクチャーコンサート(「メロディー/フィロソフィー、ニーチェ、アドルノ、思想と音楽」という形で一年目の成果を報告した。さらに、2014年11月26日に、お茶の水女子大学で、現代音楽を中心とした現代音楽と文化の関係を考える公開企画を実現した。これらの成果発表を通じて、音楽は、身体を通して共有される、一つの「場」の分析であることが明確になった。

研究成果の概要(英文)：Mars 17th 2014, at Tokyo Geijutsu Daigaku (Tokyo University of the Arts), we presented a lecture-concert, introducing two german philosophers-composers : Fr. Nietzsche and Th.W. Adorno. November 26th 2015, at Ochanomizu University, a workshop of contemporary music was presented including a conference on the early 20th century music held by Prof. Okada (Kyoto University, our partner of research). The result : the music is a sort of "site", which is determined profoundly by the cultural history.

研究分野：思想史

キーワード：音楽 思想史 身体論 現代文化論 主体化

### 1. 研究開始当初の背景

音楽の思想史を、理論と演奏の両面から多角的に研究し、その基盤を整備する必要に迫られて開始された研究である。

### 2. 研究の目的

音楽の本質にはすべからく何らかの「社会性」が潜むという前提から出発する本研究は、音楽演奏における身体の役割を切り口としつつ、近代市民文化の形成発展期の音楽思想を対象としながら、そこにおける「主体化」の契機を明らかにしようとするものである。本研究の独創性は、テキスト解釈という抽象的理論的次元だけでなく、我が国を代表する一流の音楽演奏家たちとの緊密な連携のもと、演奏家の身体知・暗黙知の次元にまで探究の次元を拡げて研究を遂行する点にあり、また演奏という具体的位相を組み込むことで、獲得された成果を一般社会と広く共有することをも目指している。このように演奏家との緊密な共同作業を行なうことにより、近代における音楽が社会の自己認識の極めて重要なツールであったことを明らかにする本研究は、新しいタイプの複合的総合的な芸術思想史の方法論の先駆となることも同時に目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 理論領域の目標：本研究が、従来の音

楽社会学とりわけ近年のカルチュラル・スタディーズ系の社会学と明確に一線を画することを明確に打ち出す。具体的には、「アドルノとヴェーバーの音楽社会学の差異」を藤井(分担者)が、「カルチュラル・スタディーズ系音楽論の陥穽」について佐藤・岡田(代表者・分担者)が、それぞれ中心となって研究会で報告する。これは、思想史分科会(佐藤担当)が主に文献研究を行い、その成果を合同の研究会で報告し全員で討議した。取り上げたのは、アドルノ、ベンヤミンをはじめ、米国カルチュラル・スタディーズのメディア論批判などであった。

(2) 実践領域の目標：市民社会の音楽家としてベートーヴェンを研究したが、その演奏解釈における身体性の問題を小坂(分担者)が、そして音楽家であろうとした思想家の問題をアドルノとルソーに即して岡田・佐藤が、それぞれ中心となって報告し、あわせてベルクの音楽とボードレールの詩的世界の連関を検討した。ベルクとアドルノの音楽における「身体性」の問題、ルソーのメロディとリズム論における身体、音楽家における身体と主体の問題などを研究した。これらの成果の公表の場として、ワークショップ形式で、演奏を交えつつ成果を示す計画を立てた。これは、東京芸術大学大学院ならびにお茶の水大

学大学院の院生も参加した演奏会プロジェクトとして実現し、理論を実際の演奏で検証することができたうえに、参加した院生たちや会場の聴衆（音楽家も多数参加してくれた）との活発な意見交換も行うこともできて、大変有意義であった。

（3）歴史領域として、バロック期の身体論と音楽論の関係を、佐藤がデカルト以降の「情念論」「感受性論」の系譜から考察し、これも（2）に述べたものと同様に、実践的なバロック歌曲の情動・内面の表現論を野々下（分担者）が実際の演奏を交えてワークショップ形式で明らかにした（お茶の水大・東京芸術大学の院生を中心として研究協力者を組織した）。

#### 4．研究成果

本課題は二年間の研究であったが、平成26年度は一端始められた研究をまとめて成果を中間的に問い、さらなる発展の可能性を探ることとした。つまりは、研究の深化とまとめの段階となる。成果公開と研究を融合するために、一流の演奏家を研究分担者として擁するという本課題研究の特性を生かして、レクチャーコンサートを開催した。幅広い研究者との意見交換を通じて、本研究を基盤研究へと発展させるべく、ワークショップを利用して研究組織拡大の可能性を探ることがで

きた。

その結果、次のような成果を挙げることが出来た。

理論領域では、「ルソーの社会理論と彼の音楽論の関係」を佐藤が、「アドルノの社会理論と彼の音楽論の関係」を藤井・岡田が、それぞれ報告し、全員の研究会で討議した。フランス革命以前のルソーと革命後のベートーヴェンの音楽における社会像を確認する。この分野では、我が国の先行研究は豊富とはいえないので、フランスでの資料調査を行うと同時に、研究のレビューを受けた。

実践領域では、野々下・小坂による実際の演奏が、で論じられることになる「主体化」（自分の演奏を自分自身の主体性の構築に用いる自己言及的な構造）との関係、すなわち演奏者自身と演奏者の出す音との自己関係が問題にされる。これは音楽教育の現場での実践知とも深く関連するから、東京芸術大学ならびにお茶の水大の院生の研究協力を組織して、ワークショップならびに公開されたレクチャーコンサートの形式で総合的に展開することができた。レクチャーコンサートは、全体の成果を公開する場として位置づけ、一般聴衆へと開かれた研究成果報告を行うように努力した。

以上の研究成果についての公表は、以下の  
ように行われた。

2014年3月17日東京藝術大学音楽学部ホールにおけるレクチャーコンサート(「メロディー/フィロソフィー、ニーチェ、アドルノ、思想と音楽」という形で一年目の成果を報告した。さらに、2014年11月26日に、お茶の水女子大学で、現代音楽を中心とした現代音楽と文化の関係を考える公開企画を実現した。これらの成果発表を通じて、音楽は、身体を通して共有される、一つの「場」の分析であることが明確になった。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)  
佐藤淳二「アルシーヴと真理」『仏語仏文学研究』47号 東京大学人文社会系研究科仏語仏文研究室編、2015年3月、81-104頁、査読無

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

岡田暁生『寒いジャズには理由がある』、アルテス・パブリッシング、2014年 243頁。

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1)研究代表者

佐藤 淳二(SATO, Junji )  
北海道大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30282544

(2)研究分担者

小坂 圭太(KOSAKA, Keita )  
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授  
研究者番号：20376966

野々下 由香里(NONOSHITA, Yukari )  
東京芸術大学・音楽学部・教授  
研究者番号：40345351

岡田 暁生(OKADA, Akeo )  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：70243136